一般社団法人 レジリエンス協会 会報

Resilience View

レジリエンス・ビュー　第20号

2017年10月31日

この号の内容

1　一歩踏み込んだ企業における災害支援～セコム災害支援プロジェクトの試み～[セコム株式会社　小松原康弘]

2 【連載コラム】食のレジリエンシー【第2回　バルト海伝説 の女神「ネリンガ」】[株式会社寶示戸 代表取締役　寶示戸嘉子]

3　BCPに取り組むことでもたらすもの(3)[e-経営推進室　代表　宮角良介]

4　協会からのお知らせ

1. 一歩踏み込んだ企業における災害支援 ～セコム災害支援プロジェクトの試み～

セコム株式会社　小松原　康弘
ya-komatsubara@secom.co.jp

(1) セコム災害支援プロジェクトとは？

東日本大震災をはじめ、昨年4月の熊本地震や今年7月に発生した九州北部豪雨災害など広域災害が頻発しており、被災地におけるセキュリティニーズが高まっている。
当社はこれまでもこうした災害にあたって地域全体の災害支援を行っており、復旧・復興支援活動の経験とノウハウを積み重ねてきた(こうした実績が評価され、2015年より3年連続で一般社団法人レジリエンスジャパン推進協議会が主催する「ジャパン・レジリエンス・アワード(強靭化大賞)」を受賞)。

そうした中で、昨年12月から「セコム災害支援プロジェクト」を開始し、被災地において行政や災害ボランティア団体を通じ、セコムグループの技術・ノウハウを活かした様々な被災地支援を展開している。また、災害発生後の支援に加え、平時からの災害への備えとして、地域防災の要となる消防団活動に積極的に協力していくため、消防団に入団する社員をバックアップしている。

(2) セコム災害支援プロジェクトの取り組み

セコム災害支援プロジェクトでは、現在以下のような取り組みを行っている。

①広域災害発生時、当社社員が被災地に入り、被災自治体や災害ボランティア団体と連携し、当社のノウハウ、専門性を生かした被災者支援を展開、これまでに熊本地震被災地にて、仮設住宅集会所へのAED(自動体外式除細動器)の提供・講習会の実施、プレハブ仮設住宅・みなし仮設住宅への高齢者救急時対応サービス「セコム・マイドクタープラス」の提供、長期避難区域への被災地見守りカメラの提供。九州北部豪雨災害被災地にて、避難所に私物管理用ダイヤル式ロッカー、熊本地震被災地でも提供実績のあるAEDの提供・講習会を実施している。

②被災地支援時の拠点となるオンサイトセンター(移動式モニタリング拠点)を開発、発災直後の対応が収束した段階で、被災地域や避難所に仮設防犯カメラを設置し、オンサイトセンターを通じ、カメラで撮影した動画を必要に応じて避難所や災害対策本部と共有することで、被災地域や被災者の方への見守りを支援していく。

③地域防災力の要である消防団は、近年は全国的に団員数の減少傾向が続いている。こういった事態を少しでも改善し、地域の災害対応力を高めていくため、社をあげて消防団活動に協力し、消防団に加入する社員をバックアップしている。

次章以降で、その詳細を紹介する。

(3) 被災地のセキュリティニーズに応じたセコム独自の被災地支援

■熊本地震被災地における試み

熊本地震では、熊本県や市町村、NPO法人全国災害ボランティア支援団体ネットワーク(通称：JVOAD)様を通じ、仮設住宅集会所においてAED提供・講習会を実施(図-1)。仮設住宅・みなし仮設住宅に高齢入居者の不安軽減と自治体・支援組織の負担軽減が課題解決を目的として、高齢者救急時対応サービス「セコム・マイドクタープラス」を提供(図-2)。被災地域の見守りを行い、被災地・被災者の方に安心感を提供することを目的として、長期避難区域への被災地見守りカメラの提供(図-3)を実施した。

執筆者プロフィール

1983年4月生まれ、2009年にセコム株式会社入社、緊急対処員・システム技術部での社内マニュアル作成・システム企画、社内業務改善プロジェクトを経て、2017年より現職。
現在は、企画部として、被災地支援の社会貢献事業、災害ビジネス創出、オープンイノベーション推進に取り組んでいる。

The Resilience Research Council of Japan All right reserved

レジリエンス・ポイント

① セコムグループでは、技術ノウハウを活かして、被災地支援を展開し、3年連続でジャパン・レジリエンス・アワードを受賞している。

② 被災地の活動拠点として、独自に「オンサイトセンター」を開発した。

③複数の事業所で、消防団に加入している社員が就業時間中に消防団活動ができるよう、積極的に配慮している。

図-1　仮設住宅集会所へのAED提供・講習会の実施

図-2　仮設住宅・みなし仮設住宅への「セコム・マイドクタープラス」の提供

図-3　長期避難区域への被災地見守りカメラの提供

■九州北部豪雨災害被災地における試み

九州北部豪雨災害では、災害発生直後から、被災地に当社社員が現地入り、避難所をはじめ、セキュリティニーズの調査を実施。避難生活を余儀なくされている被災者の方から、避難所での私物管理に困っているといった声から、JVOAD様を通じて、被災地の避難所にダイヤル式ロッカーを提供（図-4）。また、仮設住宅集会所において、熊本地震被災地の仮設住宅にも提供実績があるAEDについても提供した。AEDの提供にとどまらず、メンテナンス・講習についても息の長い被災地支援として展開していく。

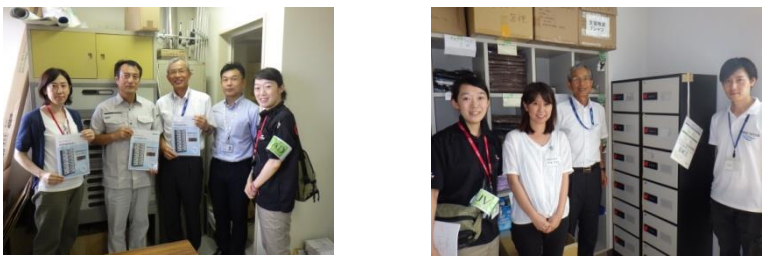
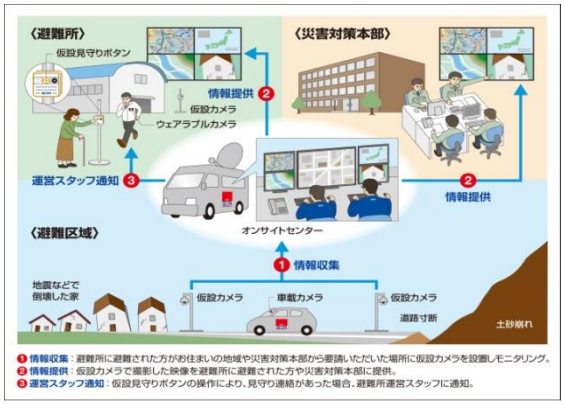


図-4　避難所への私物管理用ダイヤル式ロッカーの提供

The Resilience Research Council of Japan All right reserved

（4） 被災地支援時の活動拠点となるオンサイトセンターの開発

オンサイトセンターは、被災地支援や大規模イベント警備を展開するために、これまで培ってきた技術力・ノウハウをもとにセコムが独自に開発したものである（民間防犯として日本初：図−5）。車両内部には、「仮設カメラ」や「ウェアラブルカメラ」「車載カメラ」の映像など、さまざまな情報を表示するモニタリング画面を搭載。広域災害の被災地に入り、避難所や災害対策本部で求められるセキュリティニーズに基づき、情報収集や状況確認を行う。そして、それらの情報を避難所・災害対策本部に映像提供するなどして、被災地支援を展開する予定である。



図−5　オンサイトセンター利用イメージ・外観、内観

（5） 消防団活動への協力

当社は社をあげて消防団活動に協力し、消防団に加入する社員をバックアップしている。複数の従業員が消防団に入団、就業時間中の消防団活動に積極的に配慮している事業所に与えられる「消防団協力事業所制度」に、本社をはじめ複数の事業所で認定された。消防団は全国的に団員数の減少傾向が続き、地域防災力の低下が憂慮されている。こういった事態を少しでも改善し、地域防災力を高めていくため、地域の防災に積極的に関わり、地域に貢献しようとの想いを持っている社員には、積極的に消防団への入団を薦め、地域防災力の向上にも寄与していく（図−6）。

図−6　消防団活動の様子

（6） おわりに

当社では、速やかに被災地に現地入りを行い、物資提供にとどまらず、使い方や運用等までフォローし、セコムグループが持つ技術・ノウハウを組み合わせた被災地支援を展開していく予定である。

今回熊本地震、九州北部豪雨災害の被災地で展開した被災地支援は、その取り組みの一環であり、さらに移動式モニタリング拠点「オンサイトセンター」の開発を進めている。平時においては、避難所運営訓練や大規模イベント等に使用する予定で、それらの対応の中で、車両装備や運用を精緻化することで備えていく予定である。

引き続き被災地に足を運び、被災者の声をお伺いしながら、セコムのノウハウ・技術を生かして被災地支援を展開していきたい。

The Resilience Research Council of Japan All right reserved

2. 食のレジリエンシー
【第2回　バルト海伝説 の女神[ネリンガ]】

株式会社寳示戸　代表取締役　寳示戸 嘉子
yoshikohojito@gmail.com

(1)最果ての世界遺産 ソロベツキーへ

ふと、23年前のちょうど今頃、1994年9月末にロシアの白海の洋上にいたことを思い出した。

1584年開港、当時のロシアでは唯一の港であったアルハンゲリスク。私はそこから双胴船に乗り、最果ての世界文化遺産への旅に出た。ロシアの人々はその島を《ソロフキ》と呼ぶ。正式にはソロベツキー諸島《Solovetskie ostrova／Соловецкиеострова》。ロシア連邦北西部、白海のオネガ湾にある諸島で大小六つの島で構成され、ソロベツキー修道院などの歴史的建造物があり、1992年、「ソロベツキー諸島の文化と歴史遺産群」の名称で世界遺産（文化遺産）に登録された。

ロシア正教の偉大な修行僧が開拓した島。
白鯨にも出会える島。
古代のストーン・サークルが点在する島。

今でもソロヴェツキーはロシア人でさえも簡単に行 ける所ではない。

事前アナウンスがなく下調べの情報もなく、カオスのロシア滞在で疲れ果て…身を流れに任せてるがまま、招かれるままに、その船に乗ることになった。

出航間近。隣でノボシビルスク出身のサーシャが胸で十字を切っている。「なぜ十字架を？」と尋ねた。

サーシャは答えた。

「ソロフキは聖地であるので、厳かな気持ちになった。

（詩の一節）

ある島の話をよく聞く
その海辺には忘却の花か咲く
プライドを忘れよう
悲しみを忘れよう
病気を忘れよう
卑劣さを忘れよう
そんな島たとさ

そして、どうやら西では大きな嵐が来ている。それを恐れている。」

アルハンゲリスク出身のこの旅のスポンサーでホストであるウラジミルも「そう、嵐が来ている。だから一泊せずに日帰りになる可能性がある。」と言う。

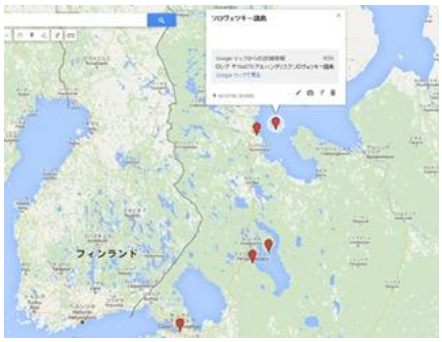


図-1　ソロベツキー諸島

ちょっとお……それって、めちゃくちゃ怖いんですけど、、、。だからといって、この地でこの時期、皆と離れるはもっと危険だ。

とにかくとりあえず皆の後について乗船した。早速、嫌な予感的中。船は横波と風で傾きながら北西を目指し始めた。

経験したことがないほど揺れがすごい。とにかく船内ではまともにまっすぐに歩けない。一人、また一人……船酔いで寝込んでいく。船長の部屋、操縦席に行くと波の高さが現実のものとして水の壁として迫る。

(2)1994年エストニア号沈没…白海のオーロラと謎の港

一夜明け水平線にタマネギ型の屋根が見え始めた。陸に近づくにつれソロベツキー修道院が全貌を現した。まるでそれらは、海からニョキっと生えてきたよう。

無事上陸。日本人では二人目の上陸。栄えある一人目は私の連れ合い。

島を巡り昼食を…と、その時、モスクワのニコライが号令をかけた。

「嵐が来ているらしい。明日以降は海が危ない。もう島を出てアルハンゲリスク港に向け出航する」

3時間の滞在で島を後にし、船に乗り込んだ。

揺れる…来た時よりもっと揺れる。とてもじゃないけど立って歩けないとはこのことか…。さすがにじっとしているしかない。

スウェーデンのドロールが廊下で叫んでいる。何事か？とドアを開けて確認すると、オーロラ出現とのこと！歩けないほど揺れてるのに、私は甲板でオーロラを見た。写真まで撮った。どうやってそこまでたどり着いてどうやって部屋に戻ったか？定かではないが壁に体をくっつけながら移動したような気がする。

図-2　ソロベツキー修道院

The Resilience Research Council of Japan All right reserved

夜が明ける頃、誰かに「港に着くから起きて！アルハンゲリスク港は嵐の閉鎖で入れない。違う港に急遽変更する。」と叩き起こされ急いで身支度をして船を降りた。黒いイルカみたいな物体がたくさんプカプカ浮いている。その上に簡易桟橋が用意された。たくさん勲章をつけたロングコートを着た海軍の紳士が私のスーツケースを持ってくれて陸まで先導してくれた。とうとう陸に上がった…。何年も経ったかのような気分だ。一体あの黒いテロンとしたたくさんの物体はなんだったのだろう？そして、あの港はどこなのか？明かされぬまま今日に至る。当時地図を調べても、現在調べても未だにわからない。

そこから、また何時間かバスに揺られアルハンゲリスク空港に到着した時、外は吹雪になった。モスクワ行きのフライトの待ち時間、そこで大惨事のニュースが飛び込んできた。
バルト海でエストニア号が沈没し800名以上が絶望的という。

(3)バルト海の女神ネリンガ伝説と食のレジリエンシー

この時期バルト海は嵐が普通に起きる。
バルト海は美しい白砂で、晴れの日には真っ青なブルーの海で、普段は静かで美しい。
しかし… 伝説からわかるように、古来から厳しい海で海難事故が絶えない歴史である。

バルト海伝説ではリトアニアの神話でneringa(ネリンガ)という女神が出てくる。
クルシュ砂州の別名『NERINGA＝ネリンガ』。その昔、砂州がまだ島々の連なりだった頃に、ある島にネリンガという美しい女の子が生まれた。ネリンガはどんどん成長し、ついには巨人になってしまう。心優しく善良なネリンガは、いつも漁師達の仕事を助けていた。ある日、海の神が怒り嵐を起した。止まない嵐の中、海は荒れ、人々は1年以上も漁に出られない日々が続いた。これを見かねたネリンガは大きなエプロンに砂を貯め、それを海に運んでは水の中に撒き、それを繰り返して砂州を作った。これによって漁師たちは内海で安全に漁ができるようになり、人々は彼女に感謝してこの砂州を『ネリンガ』と名づけた。

この伝説、ネリンガ神話 は　21世紀の現在もなお普遍的に「食のレジリエンシー」の最重要要素である「心の絆」の物語を力強く後世に伝承し続けている。

【ヒト・モノ・カネ・ジョウホウ】インフラ整備、防災、設備投資、人と人との絆・愛情……
それら全てを、老若男女へシンプルにダイレクトに誰もが知り理解し自分の国の言語で記憶に留めることを可能としてきたのだ。

図-3　ネリンガの女神

図-4　クルシュ砂州（別名『ネリンガ』）

The Resilience Research Council of Japan All right reserved

3. BCPに取り組むことでもたらすもの （3）

e-経営推進室　代表　宮角　良介
miyakado@e-keieisuisin.jp

レジリエンス・ポイント

① 災害時の相互支援協定が、平時の事業拡大にもつながる。

② 中小企業のBCPには、遠隔地に立地した企業との連携が欠かせないが、現実的には形だけのものになりがちで、実効性に不安が残る。

③ 互いの顧客の規模が共通な企業を災害時相互協定のパートナーに選んだことで、平時の販売協力や共同での新製品開発につながるなどメリットが生まれ、かつBCPの実効性が高まった事例がある。

（1） はじめに

少し時間が空いたが、この連載では「BCPに取り組むことでもたらすもの」という観点で、巨大地震などの災害による大きなダメージからの早期事業再開・復興に取り組む活動が、平時における事業活動に少なからず効果をもたらすことを紹介している。1回目は、リスク予知力と発生したときの対応力、危機を乗り切るリーダーシップなどといった人材育成に役立ち、育成の場としても優れていると述べた。また2回目では、自社のビジネスにおける事業構造や守るべき強みに対する脆弱性に気づくことで、経営戦略や経営計画の立案、業務の改革や改善に影響を及ぼし、リスクへの耐性を高めるような計画・行動とすることが出来ると述べた。

今回は、災害時における相互支援協定を遠隔地の企業と結ぶといったBCPを策定した企業が、災害時に助け合うだけでなく、平時にもお互いの事業拡大につながったという事例を参考に、特に中小企業における災害時の支援を伴う企業連携が平時の事業への効用という視点で以下に述べる。

（2） 平常時における災害時相互支援協定の効果

①中小企業のBCPの難しさ

一般に中小企業は、経営資源に余裕がなく、大災害等で大きな被害を受け、東日本大震災のような大津波により壊滅的な被害を受けた場合を想定すると、事業の復興・再開のための対策は考えることが出来ても、いざ実行となった場合には殆ど非現実的な対策となり、人、資金、土地、設備の確保は困難を極めることが予想される。

②企業連携の必要性

以上から、中小企業が生き残るには、企業間連携無くしては難しい。

地域内の同業者の組合や異業種の企業、更に他地域の同業者や他の企業と災害大国日本で生き抜くため「お互い様」の精神での連携が必須といえる。

③災害協定における企業連携の難しさ

仮に災害時に助け合う企業が見つかり、災害協定を締結できたとしても、現実には形だけになりがちである。つまり、お互いの顔が見え、日頃からの付き合いで信頼関係の構築がないと、災害が発生したから支援して欲しいといっても、期待する支援は難しいといわざるをえない。

④平時からお互いの事業を支え合う関係を構築しつつ、災害時にも助け合う体制を

災害協定が成功する道は、災害時だけ助け合う関係に留まらず、平時においてこそお互いのビジネスにメリットのある関係づくりが優先される、という関係づくりが重要といえる。

⑤西光エンジニアリング株式会社の事例

静岡県焼津市に本社を置く、マイクロ波を用いた食品関連の乾燥機プラントを製造する西光エンジニアリングは、南海トラフ巨大地震に備えるため、BCPの策定を行った。機械製造のための拠点としては、本社のみであったことから、当社が甚大な被害を受けたとしても、全国の顧客へのサービスや機械の納入を停止できない。そこで支援してくれる企業を探している時に、たまたま静岡県が北海道で静岡企業の展示会を開催したことが縁で、旭川の根菜類の洗浄機械を製造している企業と知り合うことが出来た。その企業にBCPの相互支援を持ちかけ、災害協定を結ぶことが出来た。（話がスムースに進んだのは、西光エンジニアリングがBCPを策定し、加えて静岡県信用保証協会の「BCP特別保証」の内示を受けていたことで、災害時の資金調達に不安がなかったことが大きい）

しかし、話はそれだけで終わらなかった。お互いの製品の顧客市場がほぼ共通であったこともあり、お互いの製品を顧客に紹介するなど販売協力や緊急的な機械のメンテナンスなども助け合おうと、災害に関係なくその関係を深めることができた。最近では、お互いの製品を組み合わせた新たな製品の開発についても検討が進んでいるとのことだ。

The Resilience Research Council of Japan All right reserved

（3） まとめ

よく、中小企業のBCP策定では、致命的な被害への対応として、企業連携が必要といわれているが、現実にはいざという時にも機能する企業関係を構築するには困難を伴う。

しかし、今回例示したように、災害時に助け合うのは当然として、むしろ平時において、助け合う企業間でお互いのビジネスにメリットをもたらすことに重点を置くほうが旨く行くように考える。

即ち、現実には、様々な困難もあるかもしれないが、新たなビジネスを生み出すイノベーションに取り組む仲間としての関係づくりから始め、災害時の相互支援につなげていくと、取り組みやすいかも知れないし、強力な関係が構築できるものと信じる。

レジリエンス協会からのお知らせ

（1）次回定例会のお知らせ

次回定例会は、2017年11月17日（金）13:00から（12：40受付開始） 千代田区立日比谷図書文化館小ホールで開催を予定しております。定例会への参加の詳細につきましては、当協会ホームページ（URL https://resiliencej.wordpress.com/nextmeeting/meeting/）をご参照ください。どうぞお誘い合わせの上ご参加ください。

定員： 50名
会費： 会員無料、非会員 3,000円（会員紹介の場合 1,000円）

■定例会アジェンダ（予定）
12:40 ～ 受付開始 ～
13:00-13:40 「都市・建築・人間のモニタリングとAI」
増田幸宏、芝浦工業大学システム理工学部 准教授
13:40-14:20 「水災害の軽減を目指した取り組み」
中谷 剛、防災科学技術研究所 水・土砂防災研究部門
14:20-14:30 ～ 休 憩 ～
14:30-15:10 「想定外の水害に備えるリアルタイム浸水範囲予測」
熊井暖陽、株式会社構造計画研究所 事業開発部 気象防災ビジネス室
15:10-15:50 「浸水リスクと事業継続」
神賀良明、大成建設株式会社 ライフサイクルケア推進部 耐震推進室
15:50-16:00 ～ 休 憩 ～
16:00-16:40 「中小企業が大震災にあったとき、事業継続のために何が必要か」
石井洋之、静岡大学 客員教授
16:40 ～ 閉 会 ～
＊ プログラムは変更になることがございます。

（2）次回公開研究会「リスク管理・危機対応における国際規格活用セミナー」のお知らせ

日時： 2017年12月6日（水）13:00～16:00（12：30受付開始）
会場： 千代田区立日比谷図書文化館 4階
（所在地）東京都千代田区日比谷公園1-4
会費： 会員無料、非会員 3,000円（会員紹介の場合 1,000円）

■プログラム：
12:30 受付開始
13:00～ 「ISO31000に基づいたリスク分析・評価手法について」
五郎丸秀樹、NTTセキュアプラットフォーム研究所
14:00～ 「ISO22320チェックリストの調査に基づく組織の危機対応力について」
爰川知宏、NTTセキュアプラットフォーム研究所
15:00～ 「大規模国際スポーツイベントにおけるISO22320の実践
～2017冬季アジア札幌大会での危機対応事例～」
小山 晃、 NTTセキュアプラットフォーム研究所

編集後記

早いもので、今年も残り10週間を切りました、皆様も年末に向けてあわただしい季節を迎えつつあるのではないでしょうか。早いと言えば、気が付くと、本号で「レジリエンス・ビュー」もめでたく20号の節目を迎えました。会報が継続的に発行できているのは、何にも増して会員・読者の皆様、並びにご寄稿頂いた全ての先生方のおかげです。この場をお借りして、改めて感謝申し上げます。広報委員一同、今後も1号々々発行を積み重ねていきたいと思いますので、引き続き、ご支援・ご協力・叱咤激励を、よろしくお願い致します。（新藤）

レジリエンス協会会報 レジリエンス・ビュー 第20号
発行：一般社団法人レジリエンス協会
「レジリエンス・ビュー」編集：広報委員 菊池謙三 新藤淳 宮田桜子
お問い合わせ先: info@resilience-japan.org
レジリエンス協会ホームページ http://www.resilience-japan.org/
本レポートの無断転載は禁止です。転載・引用される場合は、「出典：レジリエンス協会会報レジリエンス・ビュー第〇号」と明記して下さい。

The Resilience Research Council of Japan All right reserved